

# 学士課程教育のグランドデザインに沿った授業設計と実践（報告）

## Course Design and Practice in Accordance with the Grand Design of Baccalaureate Degree Program

本田 直也  
CELL 教育研究所研究員

大手前大学では学士課程教育の質保証のために、ディプロマポリシーを具現化し、卒業までに段階的に満たしていくための教育カリキュラムの基本設計となるグランドデザインを制定している。ある特定の必修科目のみで質保証を実現するのではなく、全ての科目、全ての学習活動を通して質保証を成し遂げるようカリキュラムは構成されている。本稿では、実際の授業を実例に挙げ、グランドデザインに沿った授業設計をどのように行ったのか、実際の授業を実施してどのようなことが起きたのかについて、授業実践の報告を行う。また、実践の中から見えてきた問題点や今後の課題についてまとめる。

キーワード：授業設計、授業実践、情報教育、学士課程教育、卒業生の質保証

### 1. はじめに

近年、学士課程教育の質保証についての意識や必要性が高まってきている。大手前大学（以下、本学）においては卒業時に満たしておく能力や状態を定義し、4年間全体を通して学生を育成していくような学士課程の基本設計にあたるグランドデザインを2011年に制定した。グランドデザインは、ある特定の必修科目においてのみ考慮されて実現されるものではなく、全ての科目、そして授業に限らずあらゆる学習活動と大学生活を通して成し遂げられるものである。

本稿では実際の授業において、グランドデザインに沿ってどのように授業運営が行われてきたのか、具体的な授業名を複数挙げて、これまでの活動を振り返りながら報告する。

### 2. 学士課程教育のグランドデザイン

グランドデザインは、能力や自己の状態を表す項目縦軸と、学年進行を表す時間横軸の2次元表で表記されている（図1）。具体的な項目は、「生命力、希望」「自己教育（主体的学習）」「知的誠実性」「基礎学力」「キャリア選択」「ライティング能力（アカデミックライティング）」「外国語コミュニケーション力」「情報活用力」「一般常識（時事問題など）」「読書（情報検索）」「資

格」「実践」「メジャー（自分で創る専門性）」「C-PLATS（社会人基礎力）」である。また、身に付けた能力と専門性を目で見える形で、プレゼンテーションにより実証することも定義されている。

本学において、全ての学生は所属学部や在籍年数に関係無く、全ての科目を履修できるようなカリキュラム体系を取っている。1年次から4年次まで配当している必修科目「キャリアデザインI, II, III, IV」、「ゼミナールI, II」、「卒業研究」においてはグランドデザインで定義されている項目の多くを網羅した授業内容と到達目標を設定している。必修科目的単位を修得できればグランドデザインの全項目とは言えないが、多くの項目を満たすことを保証する仕組みである。

本学で開講する全ての科目はグランドデザインに基づいて設計される。本学の全ての科目にはレベルナンバーが割り振られており、学習の進度を想定するとともに、必修科目やその他多くの科目的学習を通して修得済みであろう能力を想定して授業設計を行うこととしている。例えば、アカデミックライティング、一般常識、書籍の利用といった項目は全ての科目で取り入れることと定義されており、レベルを踏まえて、全科目でそれぞれ適切に学習活動や課題を設定しなければならない。

				達成する内容		方法など	
学年 学期		1 AU	2 AU	3 AU	4 AU		
知的 営みの 基盤	生命力、希望 【1年の4月が勝負】	→自身の可能性へ希望、勇気を伴っている 「私でもできるかも」「頑張ってみようかな」「この大学に来て良かった！」					
	自己教育 （主教材の学習） 【最も重要】	→大学で学ぶ目的・目標を認識している ・学ぶ事で学ぶことができる ・知的活動的魅力を認めている					
	知的誠実性等	→・カンニング等は存在することを認識している ・エチケット、マナー、ルールが守られる	→・カンニング・コピペは 厳禁に罰する				
	基礎学力・リメディアル （大学で学ぶための 最低限の力）	→・教科書の文筆力が身についている →・教科書の表現（実現）力がついている					
	キャリア選択	→既往症での自分の特徴、 能力を認識している	→・既往症についての理解を理解している ・持っている力を表現するには 何が必要なかを認識している	→・自己で生きてきた心地性を理解している ・実現を叶うための方法を理解している ・各々の意思に向けた具体的な取り組み		→・この3つはある時間までで完結 するものではなく継続していく	
	ライティング能力 （アカデミック ライティング）		→・科目ごとにA4、1ページ →・全ての科目で2つ以上の課題式の課題を課し、実際に上書き版のポートフォリオにも保存するA4、1ページあたり、40字×20行 →・全ての科目の複数の要素で、漫々と何か書かせたり、ポートフォリオで基礎させたり、次回の授業でそれらを取り上げるなどする			→・科目ごとにA4、2ページ	
	外語能 コミュニケーション力	→TOEIC 300 →TOEIC 400 →TOEIC 500 →TOEIC 550				→・他言語との交渉に適応 ・対話を通じての意見に賛同 ・意見を述べることができる	
	情報活用力 （検索、管理、 分析、表現）	→・レポート作成やプレゼン発表を行 うために活用、インターネットの活用についての最適なスキル が身についている	→・网友のレベルを上げ、 ゼミナール実行に実現の ないレベルに適している	→・网友のレベルを上げ、 卒業研究進行に実現の ないレベルに適している		→・网友のレベルを上げ、 大学院進学や就職に実現の ないレベルに適している	
	一般常識 （時事問題など）	→・全ての科目で適度に上げて、 その科目に対する興味をもつて、 質の中で動きやものを理解させる (就職の社会性)	→・网友、物理一冊記入を はじめとする	→・网友一冊記入について 自分の意見を書く		→・経済問題について 自分の意見を書く	
	読書（情報検索）	→読書＆ポートフォリオへ蓄積 適度に用意	→適度の用	→適度の用	→適度の用	→全ての科目で用紙の不正確を防ぐ、それ用纸の複数やジカルの複数等を設け、理解させる →それらの整理を、レポート、感想文、批評文、プレゼンなどの読み書きポートフォリオで基礎する →図書等の授業は、大学指定図書・科目指定図書・アカデミックなデジタル出版物・その他自由とする	
アカデ ミック スキル	波格		→初步的な実験を実験する (例) 日本語記述、等		→より上級の実験を実験する (例) TOEIC550点、日本語記述、日英翻訳2級、英会話1級等		
	実践		→課外活動、インターンシップ、留学、ボランティア、etc、実務型社会実習など				
	メジャー 自分で創る専門性 （Late Specialization）	→幅広い (もともと興味のある新しい分野も 取り入れようなど)	→学びの 方向性を 定めていく	→・プロジェクトを 決定する	→・プロジェクトの歴史、文化、 社会科学等について理解した上で、 各自の興味や志向を持った視角に いたれた説明ができる	→研究や制作の成果や履歴について、 特に知識の豊富な人に見ても 分かりやすく説明ができる	
	C-PLATS （社会人基礎力）	→C-PLATSを実質化させる（コンビジション・ファシラー・変化をめざす） →MDS、ポートフォリオ等の評議会システムによって、各科目や実務等C-PLATSの間に見える形で連携を行なう	→レベル1達成	→レベル2達成	→レベル3達成	→134単位取得 ・GPA 3.0以上 ・メジャー修了	
	実証	→いつから提示されたものから データを手に入れ、PowerPoint により資料の作成ができる →発表5分+質問5分の部分 →「プレゼン」→「レベル1は問題の プレゼンができる （プレゼンシートの目的、 観点分析、構成分析の最初 準備ができる） （→発表は下手でもいい）	→この2新規で学んできたこと、今後 の専門的なつながりの範囲、卒業後の 方向性やキャリアを踏まえた うえで、自分なりに理解できる ゼミ活動典義に適用してもらえる ようアドバイスができる →発表5分+質問5分の部分 →「Presentation」能力からレベル1程度 のプレゼンができる （プレゼンシートの目的、 観点分析、構成分析を使用して まとめておこなう）	→・専門性と社会人基礎力を統合し、 広く一般から認める「実践力」 を身につけたことを実証して、 別途評議会評議会に提出する →実践力の評議会評議会 （実践、実学、コミュニケーション、実業） を実現できると認められる →発表5分+質問5分の部分 →「Presentation」能力からレベル1程度 のプレゼンができる （プレゼンシートの目的、 観点分析、構成分析を使用して まとめておこなう）	→専門性と社会人基礎力を統合し、 広く一般から認める「実践力」 を身につけたことを実証して、 別途評議会評議会に提出する →実践力の評議会評議会 （実践、実学、コミュニケーション、実業） を実現できると認められる →発表5分+質問5分の部分 →「Presentation」能力からレベル1程度 のプレゼンができる （プレゼンシートの目的、 観点分析、構成分析を使用して まとめておこなう）		
		→実習の授業は、学年ごとにプレゼンテーションのようすを撮影した映像ポートフォリオを含むポートフォリオとして蓄積・分析・実証していく					

図1 学士課程教育のグランドデザイン

### 3. 検証対象となる授業科目

本稿では、グランドデザイン制定後の2012年度から2013年度に、著者が実際に授業設計を行い、授業担当した3科目を挙げて報告する。3科目とも情報系分野の科目であり、コンピュータ技術の理解を深める科目で、知識やスキルの修得を目指す講義科目や演習科目である。順に3科目の概要や目標について説明する。

#### 3.1. 情報システム管理

情報系科目群の中でも中核をなす講義科目の1つで、システム開発技術やプロジェクトマネジメント、サービスマネジメントに関する学習を行う科目が「情報システム管理」である。プロジェクトマネジメント手法は情報システム開発やシステム導入において必須である。この手法や考え方は情報システムのみならず、全ての分野のあらゆるプロジェクトを管理する上で有用なものであり、汎用的に役立つ技術とスキルである。サービスマネジメントに関しても同様である。

情報技術に関して学習する科目「情報システム技術」と、企業活動や経営システム戦略について学習する科目「情報システム戦略」と本科目の3科目でユニット化しており、同時に3科目を履修することで情報分野に関する基礎的な知識を網羅できる。この3科目は国家試験であるITパスポート試験の全分野を網羅しており、これらの学習を通してITパスポート試験の合格を目指すという狙いもある。

#### 3.2. 表計算演習基礎(表計算200)

表計算ソフトの活用スキル修得を目指した演習科目で、コンピュータを操作しながら学習を進めていく科目である。レベルナンバーは200と設定されており、レベルナンバー100の必修科目「情報活用I, II」の修得後に受講することを想定している。

本科目では、基礎的な関数の利用、データを効率よく処理するための関数の利用、適切なグラフの利用と作成、データベースとしての活用、ビジネスで用いる計算式などを学習する。

科目的目標として、日本情報処理検定協会の主催する情報処理技能検定試験(表計算)2級合格を目指しており、授業時間内に検定試験を受験できるような設定も行っている。

本科目の正式名称は「表計算演習基礎」であるが、表計算を学習することと、本科目がレベルナンバー200に位置すること、後述の後続科目との接続や連携も考

慮して、「表計算200」という呼称を用いている。以下、本科目のことを「表計算200」と記載し説明していく。

#### 3.3. 情報活用演習応用(表計算300)

表計算ソフトの活用スキル修得を目指した演習科目で、コンピュータを操作して学習していく点は表計算200と共にしている。本科目はレベルナンバー300と設定されており、表計算200を修得後に受講することを想定している。

内容は表計算200をより発展させたものとなっており、より高度なデータ処理関数について学習しつつ、さらに強力に自由度高くデータ処理可能なマクロ言語Excel VBA(Visual Basic for Applications)について学習する。

科目的目標も表計算200の上を設定しており、日本情報処理検定協会の主催する情報処理技能検定試験(表計算)1級合格を目指しており、試験も授業時間内に設定している。

本科目は表計算200と同様の理由で、「表計算300」と記載し説明していく。

### 4. グランドデザインの各項目に照らし合わせた

#### 授業実践の報告

グランドデザインは14の項目と、それら全てを統合して実証するという1つの活動で定義されている。ある特定の科目で全ての項目を満たすことは不可能であり、科目的特性に応じてできるだけ多くの項目をカバーする。また、科目によらず、全科目で必ず設定すべき共通の学習項目や学習活動もある。

ここでは報告の対象となっている3科目において、グランドデザインのどの項目に対応する学習活動を盛り込んでいるのか、項目の充足を表1にて確認した後に、それぞれの項目別の活動詳細を報告する。

##### (1)生命力、希望

この項目は学士課程教育のスタートを切る最も重要な1要素であり、入学直後の1ヶ月で充足することを目指す。今回報告する3科目は、およそ2年生以上を受講対象者として想定しているため、本項目を充足する授業設計は特に行っていない。

##### (2)自己教育(主体的学習)

自己教育力を養う、身に付けるというよりも、既に身についているという前提で授業設計を行っている。

表1 各科目におけるグランドデザイン充足状況

	情報システム管理	表計算 200	表計算 300
(1) 生命力、希望			
(2) 自己教育（主体的学習）	✓	✓	✓
(3) 知的誠実性等	✓	✓	✓
(4) 基礎学力・リメディアル	✓		
(5) キャリア選択			
(6) ライティング能力（アカデミックライティング）	✓	✓	✓
(7) 外国語コミュニケーション力			
(8) 情報活用力（検索、管理、分析、表現）	✓	✓	✓
(9) 一般常識（時事問題など）	✓		
(10) 読書（情報検索）	✓		
(11) 資格	✓	✓	✓
(12) 実践			
(13) メジャー（自分で創る専門性）	✓	✓	✓
(14) C-PLATS（社会人基礎力）	✓	✓	✓

学生はその科目を履修する目的を明確に持っていることと、学ぶためには何が必須なのかわかっているという前提で、いずれの科目においても主体的に予習を行ってから授業に参加するという設計を行っている。毎回の授業内容を事前に予告しておき、事前に教科書を用いた予習を行ってから授業に挑む。

講義科目の情報システム管理では、教科書内的重要用語である赤い文字で記載された単語を事前に暗記する。表計算演習科目では、その回に学習するグラフや関数の使い方を読んで理解しておく。

授業の冒頭は事前学習内容の確認小テストから始まる。学生は授業開始時点で既に基礎と概要を修得しているため、授業時間内にはより実践、応用、発展学習を行うことができ、能力育成教育に専念できる。これは広い意味で反転授業と同等の学習活動を行っているといえる。

### (3) 知的誠実性等

大学入学後の1年間で、最低限のアカデミックマナーである剽窃・盗用に関する心構えを修得しているべきであるが、現実には徹底できていない。およそ2年生以上を対象とする今回報告の3科目においても剽窃・盗用のレポート課題を提出する学生が目立つ。

3科目いずれにおいても、提出されたレポート課題について教員が中身をきちんと確認し、友だちのレポートをしたものや、ネットから拾ってきた情報をそのまま載せているいわゆるコピペレポートについては、いずれも厳しく指摘し、必ず書き直して提出するよう

催促している。再提出により剽窃・盗用が無くなることを単位修得条件と設定しているため、最終的には知的誠実性を満たした学習成果が残るようになっている。

### (4) 基礎学力・リメディアル

この項目も大学入学後の1年間で満たすべきと定義されているが、現実には十分ではない。講義科目の情報システム管理ではこれをできるだけ鍛えるよう、授業内外の学習を設定している。具体的には、毎回の授業で出題し、回収、添削しているレポート課題において、日本語表現のおかしなところは個別に指摘し、改善を促している。結果、繰り返しのレポート課題の中で、徐々に文章力の改善が見られた。また、情報技術を扱う授業であるから、いくつかの計算問題を含んでいる。例えば、単位を換算する問題（ナノ、マイクロ、メガ、ギガなど）や、処理効率や伝送効率を計算する問題、スケジューリングにおいてボトルネックを算出する問題などに取り組んでおり、繰り返し計算問題を解く中である程度の数理力向上を行っている。

### (5) キャリア選択

今回報告の3科目においてはキャリア選択、キャリアデザインに直接関係する学習活動は行えていない。

### (6) ライティング能力（アカデミックライティング）

全ての科目で論述式課題を課すこととなっており、今回報告の3科目においても例外ではない。

情報システム管理においては、文献調査・報告型の

レポートや、事例や手法の長所・短所を比較し分析してまとめるレポート、独自の視点で論拠に基づき主張をまとめるレポートなど、様々な形式で繰り返し出題している。

表計算 200においては、「情報処理技能検定試験（表計算）について、主催団体や各級のレベル、受験方法や試験内で要求・出題される具体的な要素などを調べてまとめる」という調査・報告型のレポート課題を設定した。試験要項を人から聞いて知るよりも、自分で調査し、まとめるという活動を通して、試験に対する理解を得ることを目指している。試験に合格するために試験のことをよく知ることが必須の第一歩である。

表計算 300においては、「学習項目の1つであるマクロ言語 Excel VBAについて、これを知らない一般の人にも理解できるようにわかりやすく説明する」というレポート課題を設定した。ここでは断片的な知っている知識を記述するのではなく、多角的に捉えて深く調査しつつ、バランス良く網羅して記述することが求められる。自分と同じ専門とする人同士でわかり合えるだけでなく、その専門を知らない一般の人に対してもわかりやすく説明する力を身に付けてこそ、本人にとって深めた専門の一般化と汎用化が成し遂げられる。

このようなレポート課題を通して、科目の学習目標を満たしつつ、また同時にグランドデザインのライティング能力の育成を満たすことができる。

#### (7) 外国語コミュニケーション力

今回報告の3科目においては外国語コミュニケーション力を育成する教育は行えていない。

#### (8) 情報活用力（検索、管理、分析、表現）

報告の3科目いずれも情報系分野の科目であり、直接的に情報活用力を鍛えている。鍛えている領域や学習内容は3科目の学習概要で述べたとおりである。

#### (9) 一般常識（時事問題など）

全ての科目において時事問題や社会との関連性を取り上げて学習し、該当専門科目の社会での位置づけを理解すると共に、社会の動きそのものを理解することを目指している。情報系科目は社会で実際に必要とされる実益の科目であり、教育の社会性を取り入れることは比較的容易である。

講義科目である情報システム管理においては、現在でも年々変化する情報技術や取り巻く社会について触

れ、社会が直面している課題について触れたり、情報技術や情報管理・マネジメント手法によりどのように解決を図るのかといったことに触れたりしている。

一方、演習科目においては今のところ意識的に、意図的に社会との関連を授業の中で触れられてはいない。この点は今後改善を要する項目である。

#### (10) 読書（情報検索）

全ての科目で書籍を利用し、その結果をレポート等でまとめることが設定されている。

講義科目である情報システム管理においては、毎週出題される様々なレポート課題の中で、図書館等にある本を参照しなければまとめることができない課題をいくつも設定している。学生たちの中には、課題の出題意図を十分に理解できず、書籍を用いないまま、不十分な状態でレポートをまとめ上げて提出することもある。レポート課題の添削とフィードバックにおいて、どの部分をまとめる際に書籍を用いるべきだったか指摘し、以降の課題では必ず書籍を用いるように指示している。なお、書籍を参照してレポート課題をまとめることは本科目の合格の必須要素の一つとして設定している。結果として合格に達する全ての学生が書籍を用いた学習を行っている。

演習科目的表計算 200、表計算 300においては、課題に取り組む際に必ずしも書籍を必要とはしていない。授業で指定されている教科書と、ネットで入手できる情報の組み合わせにより課題を達成することも可能な設定となっている。何らかの書籍の利用を必須とする学習活動を今後設定しなければならない。

#### (11) 資格

3章で説明の通り、情報システム管理は IT パスポート試験の合格を目指している。表計算 200、表計算 300 は情報処理技能検定試験（表計算）2 級と 1 級を目指している。いずれも授業を通して受験申込みを受け付けており、合否結果などを管理し、年々向上を図っている。

#### (12) 実践

グランドデザインで定義される実践とは、課外活動やインターンシップ、留学、ボランティア、SA、社会活動を差しているが、今回報告対象の3科目においてはいずれもその関連性について触れられるような授業は行えていない。

(13)メジャー（自分で創る専門性）

報告の3科目は、メジャープログラム内の位置づけが大変明確であり、科目単位では質保証が十分にできているため、満たしていると言える。

(14)C-PLATS（社会人基礎力）

全ての科目の学習において、社会人基礎力 C-PLATS コンピテンシーのいずれかの能力を育成することとなっている。情報系科目においては、何かの実現のためには論理的な組み立てが必須であり、論理力は強く鍛えられる。レポート課題を通して分析力が鍛えられ、資格試験の合格を目指す過程で計画力と行動力が鍛えられていく。その他いくつかの C-PLATS 項目を満たしている。

## 5. 問題点と今後の課題

本稿では情報系の3科目の取組と、グランドデザインの充足度について述べてきた。授業設計の工夫によりグランドデザインを満たしてきた点は、これまでに述べたとおりである。今後さらに充足を目指すべき項目について、ここでいくつか述べていく。

論述式レポート課題の設定は、全ての授業で課し、それも少なくとも2回という設定となっている。今回報告した表計算200、表計算300においては、1回は論述式レポート課題を設定しているが、2回目の課題を設定できずにいる。

一般常識、教育の社会性について、表計算200、表計算300では触れることができていない。実学の演習科目で、社会で認知され、十分利用されていることから、あと一步の工夫で実現したいところである。

レポート課題における書籍の利用について、現在は徹底できていない。情報系分野は良くも悪くもネット上の情報や資料がふんだんに存在し、目的にもよるが、必ずしも書籍を用いなくても必要な情報を集めきることができてしまう。また、日々の変化や進歩が大きいため、2~3年前の書籍さえも現在は通用しなくなっているものもある。普遍的に、時間が経っても変わらず通用するような学習テーマを設定し、書籍を用いて学習することが最も合理的であるような課題を設定することが必要であると考えている。

## 6. おわりに

本稿では本学が定める学士課程教育のグランドデザ

イン沿った各授業設計の基本的な考え方について述べ、実際に筆者の授業においてどのような設計がなされ、学生たちのどのような学習活動が行われたのか、という実践報告を行った。そして現状の問題点や今後の課題について報告した。

本学ではグランドデザインを制定して約2年が経過したが、各授業と大学全体においてその実質化を模索し続けている最中である。グランドデザインに関する報告や論文はまだ十分多くはなく、本稿がその先駆けである。これを呼び水として次々とグランドデザインに関する実践報告が挙がっていくことを目指したい。

本稿で挙げた問題点や今後の課題は、あと一步アイデアが足りないものや、視点の切り替えが必要なものなどである。グランドデザインの充足については、授業設計、担当者の共通の悩みと課題であり、各授業の実践報告が増えていけば、そこから相互にヒントを入手できるようになると思われる。

局所的に本稿にて報告の3科目を改善するためにも、大局的にグランドデザインの全学的実現を達成するためにも、学内全体の啓蒙がよりいつそう重要である。

## SUMMARY

Grand Design was established to guarantee the quality of Otemae University baccalaureate's program. Grand Design affects not only compulsory subjects but also all specialized subjects. In this report, few subjects are mentioned which is in the charge of the author. Course design and practice in accordance with Grand Design is described and additionally potential problems with Grand Design concept are discussed.

KEYWORDS: COURSE DESIGN, COURSE PRACTICE, INFORMATION EDUCATION, BACCALAUREATE DEGREE PROGRAM, QUALITY ASSURANCE OF GRADUATE, GRAND DESIGN